

## 「プラグマティックな自然主義」と3つの課題

井 頭 昌 彦

近年、H・プライスを中心とした複数の哲学者達により、「プラグマティックな自然主義」（以下PN）という構想ないしメタ哲学的立場が展開されている。<sup>①</sup>この立場は、

- ・しばしば対立を指摘される《プラグマティズム》と《自然主義》という2つのメタ哲学的立場の両立可能性を明示的に打ち出していること、
- ・ローティ以降、内容的な不明瞭さが指摘されるプラグマティズムの見解を、分析哲学上の諸立場との対比により、明確な輪郭を伴った形で提示していること、
- ・分析哲学の一部におけるヘーゲル回帰の流れを、ヒュームの表出主義の流れと関連づけた上で、「グローバルな表現主義」という形での統合を試みていること<sup>②</sup>、

などの点で大きな魅力を有しており、次第に注目を集めつつある。こういった現状を踏まえ、本稿では、この構想の解説と批判的検討を行う。具体的な作業としては、まずこの構想の概括的な整理を行い（第1節、第2節）、

①「プラグマティックな自然主義」と3つの課題

その上でその構想が抱えている課題を指摘すると共にそれへの対処法について論じていく(第3節)。

## 第1節 「位置づけ問題」とPN構想の独自性

PNという構想については、プライスらが擁護論のポイントを分散して様々な箇所を展開しているために全体像が把握しづらい所があるが、その要点はおそらく、

- (1) ミニマルな自然主義
- (2) 反表象主義的プラグマティズム
- (3) 形而上学的静寂主義
- (4) グローバルな表現主義

といった相互に関係する諸見解の融合体として捉えることができるだろう。そして、これらの諸見解のうち、(1)と(2)については後述する「位置づけ問題 (placement problems)」に言及することで、(3)と(4)についてはメタ倫理学上の諸立場との比較を行うことで、その内実や特徴を説明することができると思われる。そこで、本節では前者2点についての解説を行い、次節で後者2点について解説することで、PNの概要を描き出すことにしたい。

まず、「位置づけ問題」の説明から始めよう。プライスはこれを「もし実在なるものが究極的には自然的実在にほかならないのだとすれば、我々は、道徳的事実や数学的事実、意味に関する事実といったものをどのように『位

置づける (place)』べきだろうか」(Price, 2013, 6) という形で提示している。すなわち、それ自体として重要であり、我々自身がごく自然に受け入れているにも関わらず、自然主義的な取り込みが一見したところ困難に思われる様々な諸言説——道徳的言説や意識に関する言説をはじめとして、必然性や可能性に関する様相言説や確率に関する言説もここに含まれる——をどう処理するか、というのが「位置づけ問題」である。

この問題に直面した者がとりうる選択肢には、大別して以下の3つがある。

- ・ 問題の言説を自然主義的なフレームワークに押し込める。(還元主義/?)
- ・ 問題の言説を二流扱いし、真正の事実的知識の領域から排除する。(消去主義)
- ・ 自然主義という見解を丸ごと放棄することで、「自然主義的な取り込み」要請自体を拒否する。(反自然主義)

プライスはこのうちの第一の選択肢をとるのだが、その際に、従来の自然主義者達が試みてきたいわゆる「自然化」の作業とは少し異なる形で「位置づけ」を行おうとしている。従来の自然化の取り組みにおいては、たとえば《心的状態を脳状態として同定する》といった作業にみられるように、問題となっている性質や対象を取り出した上でその自然科学的・物理的対応物を探す、といった**存在論的還元**の試みがなされてきた。これに対してプライスは、当該言説における性質や対象といった《存在者》に焦点を当てるのではなく、むしろ《言説自体》に焦点を当てる。その上で、**諸言説を何らかのタスク処理のために発達した組織化ツールと見なした上で、その機能や成立経緯、由来を説明すること**で「位置づけ問題」に取り組むよう提言する<sup>3)</sup>。たとえば、道徳的言説について言えば、「盗みは悪い」といった主張が我々の社会生活において果たしている機能(非難や行為抑制等)について説明した上で、な

「プラグマティックな自然主義」と3つの課題

ぜ我々はそのような言説を發達させるに至ったのか、その言説を運用することにどのような利点があるのか、といった点について自然な説明（社会統制に寄与し生産性を向上させる等）を与えるのである。

さて、このような説明がどういう意味で「自然主義的」な位置づけ作業になっているかを理解するためには、道徳的实践についての非・自然主義的な説明を引き合いに出すとわかりやすいかもしれない。たとえば、「盗みは悪い」という道徳的見解について、それは《神の意志》に従うものであり客觀的妥当性を持つと主張したり、そうした道徳的事実の認識可能性を《我々に備わった理性的直觀によって把握可能である》として説明したりする路線について考えてみよう<sup>④</sup>。我々にとってこういった説明は基本的に受け入れがたいだろう。というのも、現代の我々がおおむね引き受けている信念体系の内部では、《神》のような超自然的存在者を引き合いに出すような説明方式は（余程の説明的利点がない限り）認められないだろうし、認知科学的・生理学的知見の蓄積に照らして考えれば《道徳的事実専用の認知器官》などというものが我々に備わっているという主張の擁護には相当膨大な（現実的には不可能と思われるほどの）コストが見込まれるだろうからである。すなわち、この種の説明は自然主義の中核にある《体系内在主義<sup>⑤</sup>》的な整合性の観点からみて——具体的には《超自然的なものを持ち込まない》とか《科学的知見を尊重する》といった制約に照らして——妥当でないものとして排除されるのである。他方で、先に例示した「行為抑制」「社会統制」に言及する説明の方は、この自然主義的観点から見て許容可能な「位置づけ」になっている。つまり、《物理主義を前提した存在論的還元》のような作業ではないとしても、自然主義という立場を（存在論的オプションを外した）ミニマルな形<sup>⑥</sup>で引き受けた上での「位置づけ」作業は可能なのであり、実際、ブライスはこの路線を推奨しているのである。

以上でPN構想を構成する(1)の要素、すなわち「ミニマルな自然主義」については理解できた。続いて、(2)の「反表象主義的プラグマティズム」に関する説明に移ろう。この構成要素について理解するためには、まず、《思考や言説の主たる機能や目的は何か》という論点に対するプラグマティズムの基本姿勢を踏まえておく必要がある。

パース以来、プラグマティスト達は《思考や言説は我々から独立した世界を正確に表象することを目的とする》という**表象主義的な見解**（時に「デカルト的傍観者説」(Baon, 2012)と呼ばれる）を批判してきた。というのも、諸概念の内容をその実際的な帰結から把握すべしとする「プラグマティストの格率」の観点からすれば、こういった構図は原理的に維持できないからである。こうした表象主義批判はDewey (1941, 178) や Quine (1953, 79) といったプラグマティスト達によって繰り返し提出されてきたが、ここではミサクの簡潔なまとめを引用しておく。

《信念保持者から独立した世界があり：信念や文がそれと対応する》という考えそのものが把握可能になるのは、我々の信念／実践／やりとりしているものの範囲から逃れうる限りのことである。(Misak, 2013, 35)

こうしてプラグマティスト達は、「デカルト的傍観者説」に示されるような構図、すなわち《知性的存在としての人間が世界と対峙し、それを正確に認識することを目指す》といった構図を拒否し、それに換えて《自然世界の中に人間が置き入れられ、そこにおいて生ずる様々なタスクを処理していく中で思考や言説を発展させていく》という構図を採用する。このような構図の採用により、《世界の正確な表象》ではなく《タスク処理》が思考や言説の中心的位置に据えられるのである。

「プラグマティックな自然主義」と3つの課題

こうした構図の転換、およびそれに伴う言説目的のシフトを踏まえた上で、「位置づけ問題」に対するPNの方針を改めて振り返ってみよう。先述の「**諸言説を何らかのタスク処理のために発達した組織化ツールと見なした上で、その機能や成立経緯、由来を説明する**」という文言を見れば、ここに「反表象主義的プラグマティズム」の立場が組み込まれていることは明らかである。たとえば、PNにおいては、我々が心や道徳について語るのは、それが《世界を正確に写しとっている》見込みが高いからではなく、共同体構成員同士の行動予測や社会的協調を容易にすることで生存その他のタスクを処理するのに有効だからだ、と説明されるだろう。あるいは、「拷問は悪い」といった道徳的主張の機能については、世界の側にある《拷問》という出来事存在が《悪さ》という規範的性質を保持しているといった表象主義的説明ではなく、この道徳的言明を主張することによってどのような実践的拘束が生ずるか、といった実践的・語用論的な分析が仔細に論じられることになる。このように、発生論的由来と実践的機能とによって問題の言説全体を《理解》するというのが、たとえば《道徳とは何か》という問いに対するPN的な回答であり、このようなアプローチの背後には反表象主義的プラグマティズムが存在しているのである。以上で、PN構想の構成要素としての(2)については十分な説明が与えられたと考えてよいだろう。

## 第2節 「形而上学的静寂主義」と「グローバルな表現主義」

前節で見たように、PNは、

・ 諸言説の目的を《世界の表象》ではなく《タスク処理》と捉えた上で、

・個別の言説について、その由来と具体的な機能を解明していく、

という作業に取り組んでいる。ここで、一定の倫理学的知識を持っていけば気づくかもしれないが、この作業は、たとえば「投影説」というカテゴリの下に位置づけられるいくつかのメタ倫理学立場が道徳的言説に対しておこなってきた説明と類似したものである。そして、実際、これらの立場との簡単な比較により、PNの主たる構成要素のうち(3)と(4)の独自性についても説明をすることができると思われる。そこで、以下では、投影説についてごく簡単に触れた上で、それとの差異を確認する、という仕方でのPNの説明を進めていくことにする。

投影説とは、たとえば『現代倫理学事典』の説明によれば、

「善悪・正邪」といった道徳的な語彙は、もともとは物事に接したわれわれの反応に由来するものだが、しかしわれわれは、「善悪・正邪」といった語彙を、対象へと投影し、あたかも対象が、そうした語彙に対応する性質を備えているかのように語る。<sup>(8)</sup>

といった仕方での道徳的言説を理解しようとする立場である。これに加えて、主唱者の一人であるブラックバーンによれば、投影説論者の多くは、我々が様々な行為を目にしたときに感じる道徳的感情(「われわれの反応」)を、何らかの仕方では本質的に備わった「所与のもの」と見なすのではなく、様々な欲求や願望を備えた人々との協調的活動を円滑にするという「社会的機能」の産物として捉える、とされる。<sup>(9)</sup>つまり、こうした道徳的実践の全体が《協調的活動の円滑化》という社会的機能の観点から説明されるのである。

「プラグマティックな自然主義」と3つの課題

さて、このメタ倫理学上の立場としての投影説に関して、現在の議論の文脈でおさえておくべきポイントは、

・善悪や正邪に関する道徳的主張、あるいはそれを含む道徳的言説全体の目的を《世界の側の事実の正しい表象》とは見なさない点、

・道徳的言説の成立経緯を《協調活動の円滑化》という社会的機能の観点から捉えるという方向性、

の2点である。すなわち、この立場と、前節までで検討してきたPNの反表象主義的プラグマティズム構想とは、道徳的言説の位置づけに関してかなりの部分を共有しているのである。すると、当然ながら、《PNの独自性、あるいはブラックバーンに見られるような投影説の見解との差分はどこにあるのか》という問いが浮上してくることになる。そして、この「差分」を理解する際の鍵がPNの構成要素の残りの2つ、すなわち(3)と(4)である。

まず、(3)形而上学的静寂主義について説明しよう。この立場においては、道徳的言説や心、数学、様相などに関する諸言説において一般的に受け入れられている《一階の諸真理》は字義通りに認められる。たとえば、「拷問は悪い」「100より大きな素数がある」「怒りは判断力を鈍らせる」といった言明はそのまま《真》と認められることになるのである。その一方で、これらの言明の正しさ・真理性について、更に問われるべき《言語実践を越えた形而上学固有の問題》がある、という考えは明確に拒否される。すなわち、「『拷問は悪い』という見解を我々は肯定しているが、それは**本・当・に**悪いのか」「素数なるものは**本・当・に**存在するのか」といった問いは拒否されるのである(このような考えは、プライスらが共感を持ってしばしば言及するCamap (1950)の言い回しを借りて、ある概念枠組の「内部問題」としては諸言明の真理性が問題なく許容されるのに対して、《当該

「概念枠組それ自体が実在世界と対応しているか」といった「外部問題」的な形而上学的問いは拒否される、と表現してもよいかもしれない。このように、形而上学固有の問いに対して沈黙を守り問いへのコミットメント自体を拒否するところに(3)形而上学的静寂主義のポイントがある<sup>⑩</sup>。

そして、この段階においてPNとブラックバーンの投影説との差異の一つが表面化する。投影説論者は、先の引用箇所にあった「あたかも対象が、そうした語彙に対応する性質を備えているかのように語る」という文言からも明らかのように、道徳的性質は世界の側に実在していないと考えている。それゆえ、たとえば「拷問は悪い」という主張を普通我々は受け入れているが、この主張は**本・当・に・正・し・い・の・か**?世界の事実を正しく表象しているのか?といった問いに対しては——道徳的主張はそもそも世界の側に実在する性質についての主張ではないという理由で——一般的に「否」と答えてしまうのである。つまり、投影説は、「**形・而・上・学・固・有・の・問・い**」を**い・っ・た・ん・引・き・受・け・た**上・で、それに対して否定的な回答をしていることになるのであり、この点において、形而上学固有の問いをそもそも拒否するPN的アプローチとの差異が存在するのである。

続いて(4)グローバルな表現主義について見ていこう。右で触れた《形而上学固有の問題へのコミットメントの有無》に関する差異は、「位置づけ」が問題にならないような言説の扱いにおいても、PNと投影説の間に違いをもたらす。先に引用した『現代倫理学事典』の説明の続きの部分を見てみよう。

そのおかげでわれわれは、「**〜は善い／悪い**」という文についても、その真偽を問うことができているが、その真偽は、「**〜はプラスの電荷をもっている／もっていない**」という文の真偽に較べると、一段落ちる。

つまり、投影説的立場は、《世界の側にある対象が備えている性質を記述すること》を目的とする實在記述的（表象的）言説と、我々の側の投影の結果であるような言説とを明確に切り分けることで、両者の間に「第1級／第2級」の区分を設けるのである（このような区分が存在するという考えがいわゆる「二分化のテーゼ」である<sup>11</sup>）。このことにより投影説論者は、前者は世界に対する真正の表象となりうるが後者はそうではない、という形で一つの形而上学的描像を打ち出すことになる。そして、後者の《世界の側の事実の正しい表象を指さない言説》に対してのみ、表象主義的なそれとは異なるアプローチ、すなわち《成立経緯や機能の分析》のみに注力した説明を行うのである（これを以下では「表現的 expressive アプローチ」と呼ぶことにする）。

ここで留意すべきは、投影説が設定するような「第1級／第2級」という区別の背後には、《世界の真正な表象であること》にプライオリティをおくような表象主義よりの価値観や言説観が暗黙のうちに組み込まれている、という点である。これに対してPNは、前節で見たように、そもそも諸言説の目的を《世界の正しい表象》ではなく《タスク処理》という観点から一貫して捉える反表象主義的立場であり、投影説の議論が非明示的にコミットしている「表象的言説／表現的言説」という区分自体に与しない。そして、その結果として、さまざまな言説を扱うにあたって《それが実在と対応しているか》や《世界の真正な記述になっているか》といったことは問題にせず、**あらゆる言説に対して**、発生経緯や機能の分析に注力する「表現的アプローチ」をとる、とされるのである（これは先に述べた形而上学的静寂主義からの自然な帰結でもあり、プライスらはこれを「哲学的人類学」と呼んでいる）。

ここで示された投影説とPNの間の2つ目の差異——1つ目の差異は《形而上学の問題へのコミットメントの有無》だった——は、一言で言えば、《表現的アプローチの適用範囲の違い》にある<sup>12</sup>。すなわち、投影説が記述的（表象的）言説／投影的（表現的）言説の区分を設けた上で後者のみに表現的アプローチを適用するのに対し、

P Nはそもそもそうした区分を認めず、あらゆる言説に対して表現的アプローチを採用するのである。これがP Nの構成要素(4)の「グローバルな表現主義」である。

### 第3節 P Nに対する3つの問題提起

以上で、P Nを構成する基本的構成要素(1)～(4)について概略的な説明を与えることができた。ここで改めてその特徴を整理しておこう。

- (1) ミニマルな自然主義…哲学的自然主義の核にある《体系内在主義》の観点から見ても明らかに無理のある説明——たとえば《神》や《千里眼》に訴えるような説明——は排除される。
- (2) 反表象主義的プラグマティズム…諸言説の主たる機能や目的を《世界の正しい表象》ではなく《タスク処理》として捉える。
- (3) 形而上学的静寂主義…「拷問は悪い」などの言説内部の一階の主張の真理性は認める一方で、《言説実践を越えた形而上学固有の問い》として問われる「拷問は本・当・に悪いのか」といった問題には沈黙を貫く。
- (4) グローバルな表現主義…記述的言説と投影的言説の区別を拒否し、成立経緯や機能分析に注力するという《表現的アプローチ》をあらゆる言説に対して適用する。

本稿冒頭において述べたように、このP Nという構想が様々な魅力を備えていることは否定しがたいが、その一

「プラグマティックな自然主義」と3つの課題

方で、幾つかの問題点、あるいは今後の議論の中で処理されるべき課題を指摘することもできる。本節では、本稿の締めくくりとして、そのような問題点ないし課題の中から3点をとりあげて吟味検討し、PNという構想をより妥当なものへと仕上げるためにとるべき方向性を提示していくことにしよう。

### 【PNは《哲学のタスク》を矮小化してしまわないだろうか？】

この論点は(3)および(4)に主として関わるものである。前節で述べたように、PNという構想においては、言説内部の一階の主張の真理性がそのまま認められるが、その上で哲学者が行うべき作業は、《その諸主張は本当に正しいか》とか《実在に対応しているか》といった形而上学的吟味ではなく、当該言説の発生経緯と運用上の機能分析に限定されることになる。プライスらはこの作業を「広い意味での人類的」ないし「系譜学的」な取り組みと呼んでいるが(MacArthur & Price, 2007 / Price, 2013)、もし哲学者が行うべき作業がこれに尽きるとPN支持者が考えているのだとすると、この構想は哲学という学問分野に対する捉え方として不適切なし不十分だと言わねばならない。というのも、ここで言う《人類学的・系譜学的研究》なるものは諸言説に対する**記述的研究**にかならないが、その一方で、我々には現状の言説実践に対して改訂提言を含めた**規範的研究**を行うことが可能だからである。

この点について、権利言説を例にとって説明しよう。PN構想のもとでは、たとえば《人々には所有権が認められる》といった主張に対して、所有権の物理的対応物を探したり、それが見つからないことを根拠にこの主張の真理性を否定したり、といった作業が主要な課題となるわけではない。むしろ、こういった主張を含むこの言説に關して為すべき作業は、権利なるものを持ち込む言説がどのような経緯で発生し、どのような利点を持つのか、ある

いは、この言説がどのように機能し運用されているのか、といった分析である。さて、こういった研究が極めて重要な意義を持つことについては、もちろん議論の余地はない。しかし、問題は、権利言説についてなすべき作業はこういった記述的研究に尽きるものではない、ということである。たとえば、《現状の権利言説をどのように改築すれば実践のあり方をより望ましい形で再編成できるか》といった仕方で規範的な課題設定を行うことは当然可能だし、それ自体極めて重要な作業であろう。そして、これまで実際に社会哲学や政治哲学の議論がそのような課題に取り組んできたことを考えれば、哲学のタスクを記述的研究に限定するような構想は偏狭なものと言わざるを得ないだろう。

関連して指摘されるべき事柄として、こういった規範的研究は、必ずしも「**本・当・に**正しいやり方はどれか」を問うような《絶対的表象を希求するような問い》として遂行される必要はない、という点が挙げられる。たとえば、ある言説の改訂作業を《別の価値のための道具的有効性》という観点から試みることは可能であるし、そのような作業においては《絶対的表象》の出る幕はないだろう（このような観点はPNの重要な構成要素である「反表象主義的プラグマティズム」とも適合的である）。こういった点を考慮するなら、諸言説に対する現状批判や規範的研究の可能性は、たとえPNの根幹にある形而上学的静寂主義を採用した場合でも、十分に確保できるのである。

なお、この《形而上学的静寂主義＋規範的研究》という形でPN構想を捉え直す可能性は、実は、プライスが様々な場面で依拠しているカルナップやブランドムの議論において既に示唆されており、また日本でも戸田山（2014）が類似の構想をより洗練された形で展開している。こういった動向を見ておくことは、本稿が提示する方向性でのPN構想の捉え直しの射程や魅力を把握する上でも有益であろう。紙幅の都合により、ここではカルナップと戸田山の議論に絞って簡単に触れておこう。

まずカルナップであるが、彼は、近年頻繁に参照される Carnap (1950) において明確に示されているように、《諸言説の一階の真理を字義通りに認めつつも、形而上学固有の「**本・当・に・…・?**」という問いは拒否する》という形而上学的静寂主義の立場を採用している。しかし、その一方で、《諸言説に対して為すべき作業は記述的研究「のみ」である》といった偏狭な考えはとられていない。このことは、たとえば「もし我々が…実践的応用の意図をもって言語の構築を望むならば…従来の言語的用法に拘束されることなく、我々の望みと目的に従って自由に「言語を」構成できるのだ」(Carnap, 1939, 24)といった発言を見れば明らかだろう。すなわち、カルナップは言説の改築や新規提案の可能性についても積極的に認めているのである。したがって、ここには《形而上学的静寂主義+規範的研究》という構想が明確に打ち出されている、と言えるだろう。

ついで、戸田山(2014)の議論を見てみよう。この著作において戸田山が設定する《課題》と《それへの取り組み方針》は以下のようなものである。

課題 …意味・価値・美など、物理的対象とはいえない「**存・在・も・ど・き**」を**唯・物・論・的・世・界・の・中・に・描・き・込・む**こと。

方針1…「存在もどき」の物理的対応物を直に探す**還・元・主・義**ではなく、その物理世界での発生経緯を把握する**発・生的・観・点**から課題に取り組む。

方針2…我々が普段用いる道徳概念や価値概念の分析(概念分析)に留まらず、より適切な形での**概・念・の・改・築・設・計**(**概・念・工・学**)にも取り組む。

容易に気付かれるだろうが、ここに示されている「問題」と「方針」は、本稿でこれまで議論されてきた様々な論

点へとほぼそのまま読み換えることができる。すなわち、戸田山（2014）に示されているのは、

課題 改…「位置づけ問題」を唯物論ベースで立てた上で、

方針1改…《諸言説をタスク処理のために発達したツールと見なし、その機能や成立経緯を説明する》という表

現的アプローチを採用し、

方針2改…そのアウトプットを規範的提言にまで展開する、

という取組みなのである。したがって、この戸田山の取組みもまた、PN的構想を規範的研究と接続させることには本質的な障壁は存在しない、ということを示唆しているだろう。<sup>17)</sup>

少し長くなったので、ここでの指摘をまとめるならば以下のようなになる。

- ・形而上学的静寂主義の元でも言説への現状批判や規範的研究は可能である。
- ・むしろ、それらは哲学の課題として実際に取り組まれてきたものでもある。
- ・ゆえに、それらは、言説の発生経緯や機能の分析と並んで、哲学の課題として積極的に引き受けるべきだ。
- ・そして、PNと規範的研究の接続可能性を示唆する類似構想はすでに存在する。

すなわち、PNという構想は、《人類学的・系譜学的研究》という記述的な形態に限定されるのではなく、規範的研究への接続可能性を積極的に認めることにより、哲学研究の実態に即したより魅力的な構想になると考えられるのである。

【対立見解の支持者との間で十分な意見交換はなされているか？】

2つ目の問題提起に移ろう。これは(2)および(3)に主として関わるものである。第1節で見たように、PNは《思考や言説は我々から独立した世界を正確に表象することを目的とする》という表象主義ないし「デカルト的傍観者説」に反対しており、その主張にはたしかに一定の説得力を備えた擁護論証が存在する。しかし、現代において、この反表象主義の見解が一般的に受け入れられているかというところではない。たとえば、現在盛んに論文が生産されている分析形而上学領域においては、1つの支配的なメタ存在論的立場として「存在論的実在論(ontological realism)」と呼ばれるものがある。これには幾つかのヴァリアントがあるが、代表的論者の一人であるT・サイダーの見解は《実在世界は、我々の志向や言語とは独立に「継ぎ目 joint」をもっており、その継ぎ目に沿って世界を記述する言語こそ存在論的に正しい言語である》といった形でさしあたりはまとめられるだろう(Sider, 2011)。一見して明らかのように、これは「デカルト的傍観者説」の現代版とも言うべき諸特徴を備えた立場である。したがって、PNの基軸をなす反表象主義の見解には、明確に対立する見解が存在し、しかもそれは無視できない数の哲学者によって支持されていると言えるだろう。

さて、先に反表象主義に関してはデューイやクワイン、ミサクらによる擁護論証が存在することを指摘したが、これを提示されて存在論的実在論者は説得されるかと言えば、おそらく答えは「否」だろう(少なくとも筆者の周囲にいる存在論的実在論者は説得されなかった。秋葉(2014)も参照せよ)。他方でSider(2011, 18)などをみても、実在論者の側が反表象主義を阻却する説得的な議論を持っているというわけではない。つまり、筆者がここで指摘したいのは、両陣営の間にはまだ十分な意見交換がなされておらず、なぜ同じ論証を前にして説得される／されないという大きな違いが生ずるかを解明し相互理解を深めることができている、という現状である。

反表象主義擁護論証によって存在論的実在論者が説得されない理由は複数ありうるし、今後さらに詳細な検討を行っていきたいが、そのうちの1つの理由は、出発点とする直観的理解が両陣営の間で異なっている、という点にあるかもしれない。反表象主義的プラグマティスト達は《我々の実践や能力についての理解》を出発点としてとり、そこから到達可能な事柄だけに論点を絞ろうとする。他方の存在論的実在論者（の少なくとも一部）は、《我々は独立に世界が存在する》という直観——これ自体は極めて健全な直観である——から出発する。そして、そこから出発する限り、《真理なるものが存在するのであればこの世界の正しい把握こそそれにほかならない》といった表象主義見解への到達はごく自然な帰結となるであろう。すなわち、両者の間には《受け入れるべき基本前提》に關して食い違いがあるのであり、この点が容易に埋めがたい見解の差異を生み出しているように思われるのである。<sup>18)</sup>

ほかにもすれ違いの要因は複数あるだろうが、いずれにせよなされるべきは、そうした要因の抽出と、それが各立場において有している重要性についての分析である。そのためには、たとえば存在論的実在論者が実際に展開する形而上学的議論がどのような仕方に進められており、そこではどのような前提や妥当性基準が用いられているか、といったことを見ていく必要がある（加えて《掲げられている目的》と《実際に提示されている議論構造》との齟齬の有無を調べることも意義があるだろう）。こうした作業は、まさに（実在論的な）形而上学的言説に対して表現主義的アプローチをとって機能分析を行うことにはかならない。実際、現在のホットトピックスの1つである哲学方法論（philosophical methodology）においては、このようなアプローチを組み込んだ研究が形而上学その他の研究領域に対してすでに幾つか提示されている（Chalmers et al, 2009 / Haug, 2014）。こうした比較対照の取組みは、PNという構想とその魅力を正確に見積もるためにも、あるいはその妥当性を批判的に検討するためにも、ぜひとも行うべきであろう。<sup>19)</sup>

【ミニマルな自然主義は一切の形而上学的描像を回避できるか？】

最後の論点は、(1)と(4)の整合性に関するものである。第1節で述べられたように、PN、すなわち「プラグマティックな自然主義」は、その自然主義たるゆえんを《体系内在主義》という自然主義のミニマルな中核部分によって担保されているが、この《体系内在主義》には2つの側面がある。1つは、我々の信念体系の外部に実在世界を措定したり、それとの対応や合致によって真理や知識を規定する見解の拒否であり、これは「デカルト的傍観者説」を退けることにも繋がっている。もう1つは、我々の信念体系内部での整合性確保要求であり、本稿第1節の表現を再掲すれば、「現代の我々がおおむね引き受けている信念体系の内部で」「妥当でないものとして排除される」ような説明を認めない、ということになる。プライスはこの後者の側面について次のように説明している。

哲学的自然主義とは何か？もっとも根本的な理解によれば、おそらくそれは次の意味において自然科学が哲学を適切な仕方で制約するという見解である。すなわち、この2つの学術分野の問題関心はまったく乖離しているわけではなく「部分的に重なっている」、そして、その重なっている部分においては科学が主導権を握る、ということである。この場合、哲学的自然主義者であるならば、少なくとも、哲学が科学と無関係な営みではないと考え、またこれら2つの学術分野が重なる所では哲学は科学に道を譲るべきだと考えることになる。(Price, 2013, 3)

ここに示されているのは、先述の体系内在主義的な整合性要求を一種の科学優先主義の形で現金化する見解である(ただしこれは《問題関心を共有しつつ見解が対立した場合には科学を優先させる》ということであり、《全事

実は科学的事実に還元される」とか《科学的事実以外は事実と認めない》といった見解とは明確に区別されねばならない。さて、ここで問題にしたいのは、この見解に従うならば、PNの構成要素の1つとされる「グローバルな表現主義」という構想は(当初想定されたようなきれいな形では)維持できない、あるいは少なくとも、当該言説に対する(機能分析に留まらない)外部からの《評価》を伴わざるを得ない、ということである。もしこの理解が正しければ、PNは、自らが攻撃していた投影説と同様に、ある種の「二分化テーゼ」にコミットすることになり、結果的に一定の形而上学的描像を打ち出すことになると思われる。

まず、プライスの科学優先主義をより一般的な形に拡張しておこう。先の引用箇所においては、《科学が主導権を握る》《科学に道を譲るべきだ》といった事態が生ずると想定されていたのは《哲学と科学の間で意見が分かれるケース》である。しかし、哲学的議論がそれ自体として1つの言説でもあることを考えれば、この科学優先主義の構図が、その他の諸言説(宗教的言説など)に拡張されないと考える理由はないだろう。したがって、以下では、プライス流の科学優先主義の見解を《いかなる言説の主張も十分確立した科学的知見と両立しない場合には撤回を余儀なくされる》という形に修正した上で議論を進めることにする。

さて、このように拡張された科学優先主義の元では、諸言説に対して《成立経緯と機能の分析のみを行い、存在論的な外部評価は行わない》という人類学・系譜学的な自制的スタンスを維持し続けることは困難であると思われる。というのも、この見解の元では、先のプライスの発言にある「道を譲る」という表現が示唆しているように、科学的見地から受容不可能な見解を本質的に含むような諸言説は、その妥当性を否定されざるをえなくなるからである。もちろん、ある言説D<sub>1</sub>に対して「表現的アプローチ」をとって成立経緯や機能の分析を行うことは常に可能ではある。しかし、ここに科学優先主義が介在し、かつ、当該言説D<sub>1</sub>に(科学的観点から見て)受容不可能な

見解が本質的に含まれている場合には、その言説D<sub>1</sub>を《科学的言説そのもの》や《科学的知見と矛盾しないような諸言説》と同等に妥当なものとして扱うことはできなくなるだろう。すると結局、言説D<sub>1</sub>は《謬見》と見なされ、一段おちる《第2級の言説》の地位に格下げされることになる。こうして、PNにおいても、表象主義的基準によるものではないとしても、《確立した科学的知見との整合性》という基準によって言説群の仕分けは行われるのであり、結果としてある種の二分化テーゼおよび形而上学的描像が提示されることになるのである。

もちろん、ここで指摘されているのは、「デカルト的傍観者説」の観点から提示される實在論的な二分化ではなく、あくまで体系内在主義の観点から提示される二分化である。そして、筆者は、この種の二分化や形而上学的描像へのコミットメントそのものに致命的な困難があると主張したいわけではない。というのも、これらは我々の信念体系に対するミニマルな整合性要求からの帰結なのであり、それが体系内在主義的な観点を堅持する限りにおいて、自然主義者として特に問題視すべき理由はないからである（改めて注意喚起しておけば、このような二分化や世界描像は、ある特定の言説に事実性を占有させる一元論的諸立場——井頭（2010）における主たる批判対象である物理主義や自然科学主義はその典型である——とは明確に区別されねばならない）。しかし、こうした問題のない形ではあっても、とにかく《二分化》を持ち込む以上、PNは自らのアプローチを、様々な言説の成立経緯や運用上の機能分析のみに注力し、存在論的・形而上学的な外部評価を一切行わない《純粹に人類学的・系譜学的な記述》として提示することはできないだろう。あるいは、PNの提示に際して提唱者達が強調したかったのは、《形而上学的静寂主義》という論点だったのかも知れない。しかし、いずれにせよ以上の議論が示しているのは、PNという構想の採用が正確なところ何を含意しているかについては、提唱者達の自己記述を鵜呑みにすることなく、改めて慎重に検討する必要がある、ということである。

文献表

- Bacon (2012) : M. Bacon, *Pragmatism : An Introduction*, Polity
- Brandom (1979) : R. Brandom, "Freedom and Constraint by Norms" in *American Philosophical Quarterly* Vol. 15, No. 3
- Brandom (1994) : R. Brandom, *Making It Explicit*, Harvard U. P.
- Brandom (2000) : R. Brandom, *Articulating Reasons*, Harvard U. P.
- Blackburn (1993) : S. Blackburn, *Essays in Quasi-Realism*, Oxford U. P.
- Blackburn (2013) : S. Blackburn, "Pragmatism : all or some?" in Price (2013)
- Carnap (1939) : R. Carnap, *Foundation of Logic and Mathematics* : *International Encyclopedia of Unified Science* 1 (3), Univ. of Chicago Press, 1939 [邦訳：ルドルフ・カルナップ「論理学と数学の基礎」『論理学の形式化(復刊版)』紀伊國屋書店'2009]
- Carnap (1950) : R. Carnap, "Empiricism, Semantics and Ontology," in *Revue Internationale de Philosophie*, reprinted in his *Meaning and Necessity* [邦訳：ルドルフ・カルナップ(永井成男ほか訳)「経験主義・意味論・存在論」『意味と必然性(復刊版)』紀伊國屋書店'1999]
- Carnap (1963) : R. Carnap, "P. F. Strawson on Linguistic Naturalism", in P. A. Shilpp (eds.), *Philosophy of Rudolf Carnap*, La Salle: Open Court, 1963
- Chalmers et al. (2009) : Chalmers & Mvoicanley & Wasseman (eds.), *Metametaphysics* Oxford U. P.
- Chomsky (1980) : N. Chomsky, *Rules and Representation*, Columbia U. P. [邦訳：N. チョムスキー [邦訳：井上和子・神尾昭雄・西山祐司訳]『言語と認識』大修館書店'1984]
- Dewey (1941) : J. Dewey, "Proposition, Warranted Assertibility, and Truth," *The Journal of Philosophy*, vol. 38, No. 7
- Menzies & Price (1993) : P. Menzies & H. Price, "Causation as a Secondary Quality," in *British Journal for the Philosophy of Science* 44 (2)
- Joyce (2007) : R. Joyce, "Projectivism and quasi-realism" in SEP (9<sup>th</sup> Dec., 2013)
- Hockney (1975) : D. Hockney, "The Bifurcation of Scientific Theories and Indeterminacy of Translation" in *Philosophy od Science*, 「プラグマティックな自然主義」とよつつの課題

- Haug (2014) : M. Haug (eds), *Philosophical Method: The Armchair or The Laboratory?*, Routledge
- Ismael (2014) : J. Ismael, "Naturalism on the Sydney Plan" in Haug (2014)
- Kitcher (2012) : P. Kitcher, *Preludes to Pragmatism : Towards a Reconstruction of Philosophy*, Oxford U. P.
- Macarthur & Price (2007) : D. Macarthur and H. Price, "Pragmatism, Quai-realism and the Global Challenge" in C. Misak (eds), *The New Pragmatists*, Oxford U. P.
- Misak (2013) : C. Misak, *American Pragmatists*, Oxford U. P.
- Price (2003) : H. Price, "Truth as Convenient Friction," in *Journal of Philosophy* reprinted in [DeCaro & Macarthur, 2010]
- Price (2011) : H. Price, "Expressivism for Two Voices" in J. Knowles and H. Rydenfeldt (eds), *Pragmatism, Science and Naturalism*, Frankfurt am Main: Peter Lang
- Price (2012) : H. Price, "Causation, Chance and the Rational Significance of Supernatural Evidence" in *Philosophical Review* 121 (4)
- Price (2013) : H. Price (with S. Blackburn, R. Brandom, P. Horwich and M. Williams), *Expressivism, Pragmatism and Representationalism*, Cambridge U. P.
- Putnam (2004) : H. Putnam, "The Content and Appeal of 'Naturalism'" in Mario de Caro and D. Macarthur (eds), *Naturalism in Question*, Harvard U. P., 2004
- Quine (1953) : W. V. Quine, *From a logical Point of View*, Harvard U. P., 1953 [邦訳：W・V・クワイン(飯田隆訳)『論理学的観点から』勁草書房、1968年]
- Rorty (2007) : R. Rorty, *Philosophy as Cultural Politics : Philosophical Papers Vol. 4*, Cambridge U. P., [邦訳：リチャーズ・ローネン(富田・戸田訳)『文化政治としての哲学』岩波書店、2007年]
- Sider (2011) : T. Sider, *Writing the Book of the World*, Oxford U. P.
- Williams (2013) : M. Williams, "How Pragmatist can be Local Expressivists" in Price(2013)
- 秋葉(2014) : 秋葉剛史『真理から存在へ——《真にするもの》の形而上学——』春秋社
- 井頭(2010) : 井頭昌彦『多元論的自然主義の可能性』新曜社 [英訳：M. Igashira, *The Possibility of Pluralistic Naturalism*, forthcoming]

井頭(近刊)・井頭昌彦、「複数のコンテクストは(そもそも)どの程度)統合されねばならないのか―物語り論における「法則適合性」条件の有効射程を手がかりに」、『一橋社会科学』(特集号)

伊勢田(2003)・伊勢田哲治、『擬似科学と科学の哲学』、名古屋大学出版会

伊勢田(2014)・伊勢田哲治、『哲学入門』(1) (ブログエントリ) URL=<http://blog.livedoor.jp/iseda503/archives/1805752.html>

(2014年9月1日アクセス)

大庭ほか(2006)・大庭健、井上達夫、川本隆史(編)、『現代倫理学事典』、弘文堂

児玉(2010)・児玉聡、『功利と直観―英米倫理思想史入門―』、勁草書房

戸田山(2014)・戸田山和久、『哲学入門』、ちくま新書

野内(2012)・野内玲、『科学的知識と実在―科学的実在論の論争を通して―』(博士学位論文/名古屋大学大学院文学研究科 提出)

## 註

(1) この名称は、プラグマティズムについての概説書(Bacon, 2012)の中でプライスの立場に対する呼称として用いられたものであり、より一般化されたメタ哲学的構想としてはJ. Ismaelにより "Sydney Plan" という呼称の下で再整理がなされている(Ismael, 2014)。プライスの見解についての(本稿よりも概略的な)解説としてはRorty (2007, Chap. 7)を挙げることができる。なお、自身の立場に対してこの呼称を用いる別の著名な哲学者としてD・キッチャーがおり(Kitcher, 2012)、「プライスとキッチャーの立場の間には興味深い類似点と差異があるが、紙幅の都合上、本稿ではプライスの見解に限定して議論を進める。

(2) この点については特にPrice (2011)を参照せよ。

(3) Price (2013)では存在論的還元を試みるマップローチを「客体自然主義(object naturalism)」と呼称した上で批判し、自身のマップローチを「主体自然主義(subject naturalism)」と呼称している。

(4) このような立場がかつて存在したことについては児玉(2010)を参照。

(5) この点に関しては井頭(2010)を参照。ここでは、現代における哲学的自然主義の立場を「体系内在主義」―真理

「プラグマティックな自然主義」と3つの課題

- 性評価や認識論的正当化は我々の信念体系の内側からなされねばならないとする立場——および「第一哲学の放棄」の組み合わせというミニマルな仕方でも特徴づけた上で、そこに物理主義や科学主義といった見解を付与することは可能ではあるがそれはあくまで「オプション」である、といった整理を行っている。なお、しばしば誤解されているが、現代における哲学的自然主義を《自然》科学的方法の採用」とか《自然》科学的存在論の採用」といった形で特徴づけるのは、この立場が提出されてきた経緯からして不適切である。
- (6) Price (2013) でいう「主体自然主義」は本文でいう「ミニマルな自然主義」に対応している。なお、プライスは自身のアプローチと対立する《物理主義を前提にした存在論的還元プログラム》といった典型的な自然主義路線は維持不能であると考えている。
- (7) Price (2013) に見られるように、プライスはこの語用論的分析の基盤的部分に関して、Brandon (1994, 2000) の議論に依拠している。本稿では様々な言説についてのPN的アプローチの詳細について触れる余裕はないが、因果言説や確率言説についてのプライスの議論の詳細については、たとえば Menzies & Price (1993) や Price (2012) を参照せよ。
- (8) 大庭ほか (2006) の「投影主義」の項目より。他にも、Joice (2007) などを参照せよ。なお、本稿の文脈から離れてメタ倫理学史的な観点から見た場合、投影主義のポイントは、情動主義などの非認知主義的立場の一面での説得性（《世界の側で成立している道徳的事態とその知覚》のような超自然的な説明を避けられる点）を引き受けつつ、他方で《我々は道徳的事実や道徳的主張について真偽を問えるものとして語っている》という（情動主義ではうまく説明できない）事実をもうまく説明できるようにする、という点にある。
- (9) Blackburn (1993, 164) を参照。
- (10) このような考えの背後には、いわゆる真理に関するミニマリズムの見解が存在する。すなわち、真理を対応や整合性、合意といった何らかの実質的な特性によって定義することを拒否し、引用解除その他の最小限の機能しかもたないものとしてとらえられる見解である。Blackburn (2013) も参照のこと。
- (11) MacArthur & Price (2007) 井頭 (2010、特に3・4節) および Williams (2013) を参照せよ。なお、このように「二分化テーゼ bifurcation thesis」は、もともと翻訳の不確定性テーゼを巡る議論の中で Hackney (1975) や Chomsky (1980, 15-6) により導入されたものであるが、後年では自然主義論というより広い文脈においても Putnam (2004, 61) などによる言及がある。ちなみに、ブラックバーンの準実在論では第2級の言説内部の主張に関しても問題なく真理性が認められ

ることになり、この点で虚構主義や錯誤説とは差異がある。

- (12) 通常、メタ倫理学の文脈では *expressivism* は「表出主義」と訳されるのが標準的であるが、本稿ではあえて「表現主義」という訳語を用いる。というのも、プライスらが提唱するグローバルな *expressivism* は、メタ倫理学の文脈で言われる「表出主義」に加えて、R・ブランドムが導入している *expressivist* アプローチを組み合わせたものであるが (Price, 2011) 後者の側面に関しては「表出」という言語表現は馴染まないと考えられるからである (ブランドムの議論の文脈で言う *expressivism* は、『外的世界を表象すること』ではなく『実践の内に非明示的に存していたものを言語的に明示化する (making it explicit / expressing) こと』に我々の概念活動の枢要を見るアプローチであるが、ここで言う「明示化」はあくまで非明示的なものから明示的なものへの移行であって、内面的なものの外面化ではない)。

- (13) MacArthur & Price(2007)を参照のこと。

- (14) ブランドムについては紙幅の都合で割愛したが、Brandon (1979)における「表現的自由 *expressive freedom*」の議論は、後述の「概念工学」との関連で一読に値する。

- (15) この点については MacArthur & Price (2007, Chap. 3) も参照せよ。

- (16) このカルナップの考えは、次の引用箇所において明確に打ち出されている「反表象主義的プラグマティズム」的な言語観と組み合わせ読まれるならば、あるべきPNの方向性を体現したものととして理解することができるだろう。

自然言語は粗雑で原始的なポケットナイフのようなものであり、無数の異なった目的に対してとても有用である。だが、ある特定の目的のためには特殊な道具 (彫刻刀や裁断機、とことんまでいけばミクロトームなど) の方がより有効である。もし与えられた目的に対してポケットナイフがあまりにも粗雑であり、欠点のある製品「哲学的混乱」を生み出してしまふことが判明した場合には、我々は失敗の原因を調べて、そのナイフをもっとうまく使用するか、その目的に対してより適切な道具に持ち替えるか、新しい道具を発明するかすべきであろう。自然言語主義者のテーゼは、特殊な道具の持ち込みは『粗雑な道具の正しい使用法とは何か』という問題をはぐらかすことになる、と述べているようなものである。しかし、細菌学者がミクロトームを使うことを誰が批判するだろうか？ また、「細菌学者は『ポケットナイフの正しい使用法』という問題をはぐらかしている」と主張する人がいるだろうか？ (Camap, 1963, 938-9)

- (17) ただし、戸田山の構想をPNと同一視することには問題がある。というのも、戸田山構想には科学的実在論や唯物論といった形而上学的前提が組み込まれているため、PNの構成要素(3)を許容できない可能性があるからである。

「プラグマティックな自然主義」と3つの課題

なお、本稿で肯定的に言及された戸田山の「概念工学」構想に対しては、伊勢田(2014)を始めとするいくつかの批判が提起されているので、ここで簡単な擁護論を展開しておこう。たしかに、伊勢田が指摘するように「直観を使用するか否か」という点で「概念分析」と「概念工学」を区分するという方針には無理があるだろう。この点では筆者は伊勢田に同意するが、他方で、たとえばある理論化方針に対して《そう理論化することによるプラグマティックな利点の存在》を正当化根拠として認めるか否か、という点で両者を区分することは可能であるように思われる。たとえば、伝統的認識論者は知識条件のある定式化を擁護する際に《そう定式化することによる実際のなタスク処理上の有用性》を持ち出して正当化することは認めないだろうが、概念工学者にとってはそれも立派な正当化根拠になるだろう。このように、何らかの仕方で識別基準が提示可能であれば、この「概念分析／概念工学」という区分それ自体は維持可能である、と筆者は考えている。

ただし、筆者は戸田山(2014)で提示された構想全体に賛同しているわけではなく、たとえば、同書における唯物論的／物理主義的前提については余分だと考えている。というのも、発生論的観点をとり、《唯物論的対応物が無い概念》についてもタスク処理という観点から機能的意義を認めるのであれば、概念の新規設計に際して物理主義的な制約をかける特段の必要性はないからである(そういった制約を課す場合、「概念工学」というよりは「概念の物理的接地」という名がよりふさわしいだろう)。

(18) たとえばPrice(2013)の「主体自然主義」を巡る議論と、秋葉(2014)の第一章を比較せよ。

(19) この両陣営の対立点を明確化する際に、いわゆる科学的实在論論争における議論構図との比較照合を行うことは有益であるろう。筆者の見解では、存在論的实在論の立場は奇跡論法ベースの科学的实在論と一定の議論構造を共有し、反表象主義&形而上学的静寂主義の立場はいわゆる「自然な存在論的態度」と多くを共有しているように思われる。科学的实在論論争の概要については伊勢田(2003)を、より詳細な検討としては野内(2012)を参照せよ。

(20) この再定式化は「十分確立した」と言えるための基準に関して明確に出来ておらず、その意味で不十分なものであるが、以降の議論においてはこの点は問題とならない。気になる向きには、さしあたり、科学的知見と相容れない何らかの主張を為す場合には対立している《科学的知見》の支持根拠よりも強い主張根拠を提示する義務がある、といった規範の形で再々定式化を提示しておく(《根拠の強さ》に対する評価基準が言説間で異なる可能性を考慮すればこの再々定式化にも不満足な点が残るが、少なくとも一定の理解は確保できよう)。

(21) ただし、この「整合性要求」が実際の所どの程度の言説間調整を要求するかについては議論の余地がある。この言説間調整基準の問題については、井頭(近刊)において自由意思言説と決定論言説を事例にとった検討がなされている。

(22) 実際、哲学的自然主義が「第一哲学の放棄」を中核の1つとして含むのであれば、第一哲学的構想を掲げる哲学的言説は——それを表現的アプローチによって分析することはもちろん可能であるとしても——《謬見》として排除されることになるはずである(物理主義や自然科学主義をオプションとして採用するならば、この意味で排除される言説はもっと増えるだろう)。つまり、哲学的自然主義は、どれだけミニマルに展開されようとも、それ自体のうちに一定の言説排除を組み込んでいるのである。この点は2011年に開催された第一回自然主義研究会(於東北大学)における荻原理氏との議論によって明確にすることができた。ここに記して氏に感謝する。

付記 本稿は平成二十六年科学費補助金(課題番号…24720007)による研究成果の一部である。

(いがしら まさひこ・一橋大学)